

氏 名 (本籍)	熊 寰 (中国)
学 位 の 種 類	博士 (学術)
学 位 記 番 号	甲第 85 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	粤东北客家乡土建筑研究 ——以广东省兴宁市上长岭村围龙屋为中心
論 文 審 査 委 員	主査 愛知大学教授 周 星 副査 愛知大学教授 松 岡 正 子 副査 愛知大学教授 唐 燕 霞

摘 要

围龙屋是位于粤东北的一类乡土建筑类型，也是重要文化遗产。围龙屋极具特色，主要体现在建筑文化内涵及社会性特点。本文从文化遗产视角，以乡土建筑为研究对象，将围龙屋作为切入点进行调查研究。研究时，主要聚焦在围龙屋的空间上，本文将其分为私有空间和共有空间两部分，而后者是本文研究的重心。

对此，本文主要从三个研究角度展开。一是哲学层面对乡土建筑的分析，重点引渡了列伏斐尔的空间生产理论，统领围龙屋的行文脉络。二是从历史学角度展开传统宗族制度对围龙屋社会性的影响。本文将“人”与“物”这两方面结合起来，进行探索性研究，重点反映和揭示了传统宗族制度与围龙屋空间的关系。三是从建筑人类学角度展开对乡土建筑的研究，因为传统的乡土建筑能够最直接地表现价值、意向、观念和生活方式及其变动。本文通过调查其承载和生产的围龙屋文化，展现围龙屋的社会事实。

全文共分为六章，第一章为绪论，首先阐述了本研究的缘起、过程、方法、思路、目的和意义等，对全文进行的铺垫性的介绍。其次，从客家源流研究、客家社会文化研究和围龙屋研究三方面回顾了与本文相关的重要研究成果。第二章为理论架构，从空间、记忆到乡土建筑理论三方面阐述了本文的理论框架。其中空间角度引渡了列伏斐尔的空间生产理论，记忆角度引渡了哈布瓦赫的集体记忆理论，以及人类学关于族群方面的研究成果。乡土建筑角度主要引渡了拉普普的乡土建筑文化决定论。第三章讨论了客家族群的建构过程，通过引用历史学研究成果，指出了“客家中原说”的建构问题及其方法论的错误，并对包括围龙屋在内的客家民居做了总体阐述。第四章探讨了围龙屋空间的构造，以上长岭村为中心，阐述了该村围龙屋的社会性脉络、空间的布局以及传统工艺技术。第五章讨论了围龙屋的宗教空间，在将其分成祖先空间、神灵空间和生殖空间的基础上，重点探讨了祭祖、上坟、葬俗、龙神、三山大王、上灯、化胎与五行星石等内容。第六章讨论了围龙屋的公益空间，首先从宗族公益和家族公益两个角度分析了围龙屋的公益传统，其次阐述了围龙屋的公益现状，包括公益组织、个体公益和公益活动等。

通过对全文的论述，本文得出了围龙屋共有空间已然衰落和必然衰落的结论，并重点从宗族制度及其所依附的宗法社会角度对此做了解释，从而归纳出社会性文化遗产不可能存在实质性传承和复苏的观点。

審査結果要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、熊寰より提出された博士の学位授与申請書および参考関連論文等関係資料により、2014年11月25日午後、愛知大学車道校舎で予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項について、審査委員が意見を交換し、慎重に審査した。

(1) 学位論文の予備審査及び履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できる。

(2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果は、博士学位論文は基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。

2015年1月28日午前11時—12時30分まで、審査委員会は熊寰より提出された学位論文の本審査を行った。審査はスカイプを使って名古屋校舎L342研究室と広州を結び、順調に行われた。

まず、熊寰より、学位論文の趣旨、先行研究、理論の枠組みや方法論、キーワード、研究対象となる地域と村の概況、フィールドワークの収穫や一次資料の信憑性、及び論文の構成、本研究の斬新性や問題点などについて、陳述がなされた。つぎに、審査委員より、質問やコメントを行い、口頭試問を行った。すべての質問に対して、熊寰より回答や説明がなされた。それらの回答に対し、審査委員全員は概ね納得できるレベルに至ったという共通認識を持った。

口頭試問終了後、引き続き審査委員会は議論を重ね、以下の決議案をまとめるに至った。

熊寰の学位申請論文は、『粵東北客家郷土建築研究—以広東省興寧市上長嶺村圕龍屋為中心』を題とし、中国広東省興寧市のある村の郷土建築群を「公共空間」や「文化遺産」の視点から系統的に研究したものである。「圕龍屋」とは、世界遺産として知られる「福建土楼」と並び、広東省東北地域の客家人の伝統的な郷土建築のタイプの一つであり、その伝統的な建築技術や全体の「圕龍」構造、デザインの発想及び間取り、周辺環境との関係性などに様々な「意味」が込められており、それらの「意味」を解明しようとするのが熊寰論文の狙いである。

熊寰論文のメリットとして、以下のいくつかがあげられる。

一つ目は客家人の歴史、客家人社会及び文化の研究、客家の郷土建築「圕龍屋」の研究をめぐって、それぞれの先行研究を批判的に整理したことである。これらの先行研究を通して、本研究の位置付けを明らかにした。

二つ目は関連のある諸理論や方法論を綿密に説明し検討したことである。「族群」(ethnic-group)をめぐり理論や集団記憶に関する理論、公共性の理論や空間の生産性に関する理論、及び郷土建築に関する文化決定論などを、それぞれ整理し、本研究の課題への適合性を真剣に検証した上で、それぞれ本論に書かれた客家人共同体の歴史の想像と真実、客家人共同体の文化的実存、即ち村や民家及び「圕龍屋」の形態、「圕龍屋」の公共空間の構築プロセス、さらにその空間の生産性等々の部分に結び付け、独自の解釈や持論を展開

しようと試みた。方法論のポイントとして、「囲龍屋」と呼ばれる郷土建築群を「もの」・有形の文化として研究することにとどまらず、「もの」を通して、その「囲龍屋」に住んでいる、あるいは住んでいた人々の生活様式、彼らの宗族組織の在り方、「囲龍屋」郷土建築群の公共空間で繰り返し演出されている様々な儀式をも射程に収めて、調査研究をしたことにより、「囲龍屋」郷土建築群に関して有形・無形の両面からのアプローチを実現したと言える。

三つ目は、長期間の現地調査、即ちフィールドワークを実施し、参与観察や聞き取り調査などの手法を活かし、大変貴重な一次資料を数多く入手・把握し、特にある典型的な「囲龍屋」（四角楼）に関係する清朝の康熙帝時代の設計図を発見したことにより、その「囲龍屋」に絡んでいた数多くの謎も解読できたことである。信憑性の高い研究資料を駆使し、今までの客家郷土建築群の研究において、かつてない研究レベルに達したと評価される。

四つ目は、以上の努力を踏まえ、本論文において、独自の知見をいくつか提出し、本研究課題の研究に着実な貢献を成し遂げたことである。たとえば、上長嶺村のすべての「囲龍屋」を全体として把握し、その数、規模、構造、歴史的経緯及び、今現在利用されている状況などを明らかにした。また、宗族の族譜における人間関係と照合し、「囲龍屋」と他のタイプの民家の関係、「囲龍屋」同士の系譜的關係なども明らかにしたことにより、「囲龍屋」の諸問題について、その公共空間と宗族制度の關係性の解釈が根拠のあるものとなった。さらには、「囲龍屋」の立地条件、「囲龍屋」の周辺建築物を含む構造全体を見渡し、風水原理など中国的な空間原理を分析し、「囲龍」、「化胎」、「禾坪」、「月池」、「風水林」などを機能的に説明するだけでなく、象徴的な意味の生成についても、整合性のある説明がなされた。「囲龍屋」郷土建築群の公共空間についても、その空間構築の建築手法は勿論、それらの公共空間の配置原則、公共空間の分類（祖先空間、神霊空間、生殖空間などを含む宗教空間と公益空間）を明らかにし、それぞれの公共空間で演出された、あるいは現在においても時々演出されている様々な儀式・祭典（祖先祭祀、墓参り、葬送儀礼、龍神信仰、三山大王信仰、上燈など）を記録・説明したことにより、「囲龍屋」郷土建築群の公共空間の生産性、即ちその空間に潜んでいるパワーをも論述した。

最後は、着実に綿密な現地調査に基づいて、「文化遺産」としての「囲龍屋」郷土建築群の特徴を理解し、「囲龍屋」の廃れる現実やその深刻な原因について、「囲龍屋」の所有者、相続者あるいは伝承者がかつて依拠した宗族組織が逆戻りのできない衰退傾向にあり、それに関連する「囲龍屋」郷土建築群の文化遺産化が進んでおり、本質的な復興や伝承がもはや不可能な状況へと変容しつつあると鋭く指摘した。この論点からすると、本論は、現在、地元において、地方政府の主導する「囲龍屋」郷土建築群を偉大な文化遺産へと祭り上げる保存・保全活動などに対して、建設的な警告であるとも言える。

本論文の構成は論理的であり、数多くの写真や図が付け加えられることも評価できる。

本論文のデメリットとして、いくつかの点が指摘された。

一つ目は、フィールドワークを実施したにも関わらず、調査対象になったコミュニティの全体像をはっきりと説明していなかった部分があることである。たとえば、それぞれの「囲龍屋」と村の各姓との関係、また、「囲龍屋」とその周辺他のタイプの民家との関係などはさらなる研究が必要である。

二つ目は、西洋の理論を客家郷土建築群の研究課題にどう結び付ければ、より生産的な

論説が展開できるのかという点である。例えば、複数の理論を駆使するより、公共空間の生産性理論に集中的に絞ったほうが効果的なのではないかなど、検討が必要である。以上の問題点については、今後の追加調査や論点整理により十分解消できると思われる。

よって、審査委員会は全員一致で、本論文は愛知大学大学院の論文博士に関する定められる諸要件を満たしているという結論に至ったのである。

以 上